

# 日本語における Evidentiality

—形態素 [-i]—

山 本 雅 子

## 要 旨

日本語の時制形式とされる形式を構成する形態素のうち、動詞の一部、形容詞、形容動詞の一部に共通する形態素 [-i] の意味機能を Evidentiality の観点から考察した。小説の文章を言語資料として考察した結果においては次のことがいえる。三種類の品詞に共通する [-i] の Evidentiality は、まず、知覚もしくは知覚体験に基づく知識をパラメータとする、次いで、対象とする事態を同位置で事態を解釈するという点において共通している。しかしながら、その事態解釈の仕方は、品詞に応じて三者三様に異なる。動詞では同位置での解釈が事態の实在解釈であること、形容詞では同位置での解釈が判断であること、助動詞では同位置での解釈が推論であることという三様である。

キーワード：時制・アスペクト形式、グラウンド化、同位置、知覚、知覚経験

## 1. 問題の在処

時制形式と称される言語形式が「時制」という呼称とは齟齬をきたした意味機能を果たすという現象は多くの言語で指摘されている<sup>(1)</sup> ところであるが、日本語の動詞の時制・アスペクト形式とされる [-ta] [-teita] [-ru] [-teiru] 形式も同様の現象をみせている。[-ta] [-teita] [-ru] [-teiru] 形式の振る舞いに、時制・アスペクト機能の側面から説明可能な場

合が多くみられるのは確かである。しかしながら、それぞれの形式には、従来の文法説明では〈例外〉として扱わざるを得ない機能も実に多様に存在していることも周知の事実であり、この事実からは時制・アスペクト機能を [-ta] [-teita] [-ru] [-teiru] 形式が備える本質的意味機能とすることの妥当性が否定される。また、日本語では動詞のみならず、形容詞、形容動詞、助動詞という活用語すべてに時制があり、形容詞では [-ta] vs. [-i]、形容動詞では [-ta] vs. [-da]、助動詞では [-ta] vs. [-i]/[-da] の対立がそれぞれ過去と現在の対立を表すとされている。そして、これらの形式にも時制では説明できない振る舞いが見られることは動詞と同様であり、したがって、形容詞、助動詞の時制形式といわれる形式についても時制をその本質的意味機能とみなすことは問題視される。

いわゆる時制形式と称される形式が、確かに時制を表すこともあることから、しかも、日常の会話では時制として機能する頻度が極めて高いことから、これまで、便宜上、〈時制形式〉という呼称を与えられてきたことも納得のいかないことではない。しかしながら、実際には時制では説明できない意味機能を果たすことが分かっている以上、便宜上与えられた〈時制〉という呼称に呪縛されて、これらの形式の本質的意味機能をあくまでも時制を表すことにあと固執することが如何に不適切な研究姿勢であるかは明らかである。

本稿では、時制形式の意味機能の解明を求めて、言語を自律した記号体系とみなす従来の言語研究パラダイムからパラダイム転換し、言語主体を基軸とした事態把握<sup>(2)</sup>の観点から Evidentiality 概念の作動について考えたい。Evidentiality とは、情報の出処を示すことを第一義とする言語範疇であり、文法的範疇としては、Franz Boas によって 1911 年にアメリカインディアンの言語について提唱された未だ新しい概念である。近年では急速に研究が進んでおり、いくつかの言語において、同一の形態素が時制・アスペクトと Evidentiality を表示することが発表されている<sup>(3)</sup>。これらの知見を鑑みるに、日本語についていえば時制・アスペクト形式を構成する形態素 [-i] が Evidentiality 表示機能をも備えているのではないかと考えられる。形態素 [-i] とは、動詞の時制・アスペクト形式の [-te-i-ru]<sup>(4)</sup> を構成する [-i] と、形容詞と助動詞の時制形式として現れる [-i] のことである。本稿では、これら、動詞、形容詞、助動詞に共通して現れる形態素 [-i] の意味機能を Evidentiality の観点から考察する。

## 2. Evidentiality とは

Alexandra Aikhenvald (2004) は、世界の言語のおよそ四分の一はなんらかのかたちで文法的 Evidentiality を示していると報告している。ここでは、Alexandra Aikhenvald (同) にある Evidentiality の定義と、Evidentiality を示すパラメータを紹介する。

## 2.1 定義

「情報の出処を示すこと」を第一義とする文法範疇を Evidentiality と呼ぶ。Boas (1938: 133) の言葉を借りれば、「われわれにとって、定不定、数、時間が必須様相であるように、別の言語では、話者との距離や、見たのか、聞いたのか、推測したのかといった情報の源が必須様相となっているのである。」

## 2.2 パラメータとタイプ

文法的 Evidentiality を備えた言語には次に示す六種類の意味的パラメータが存在する。

- I. VISUAL：視覚を媒介として獲得された情報。
- II. NON-VISUAL SENSORY：聴覚を媒介として獲得された情報であり、嗅覚、味覚、時には触覚へと拡張する。
- III. INFERENCE：見たり、触れたりした証拠に基づく、もしくはその結果。
- IV. ASSUMPTION：目にした結果以外の証拠に基づく：論理的理由、推測、一般的知識。
- V. HEARSAY：それを報告した人や媒体に言及することなく情報を報告する。
- VI. QUATATIVE：それを引用した源をあからさまに言及することなく情報を報告する。

これらのパラメータが、firsthand, visual, infer, reported, direct の五種類の evidentials とともに作用する。first hand evidential とは、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れる、といった身体感覚を通して情報を獲得することを意味する。また、direct evidential とは話者や参与者自身の感覚的経験を意味し、多くの場合、visual evidential と同義である。五種類の evidentials のはたらきは言語によって2-5種類の選択となる。表1で示される。

表1 Semantic parameters in evidentiality systems

	I. Visual	II. Sensory	III. Inference	IV. Assumption	V. Hearsay	VI. Quotative
2 choices	firsthand		non-firsthand			
	firsthand	non-firsthand				
	firsthand		non-firsthand	different system or <no term>		
	<no term>	non-visual	<no term>	reported		
3 choices	direct		inferred	reported		
	visual	non-visual	inferred		<no term>	
	visual	non-visual	inferred			
	visual	non-visual	<no term>	reported		
	<no term>	non-visual	inferred		reported	
4 choices	visual	non-visual	inferred		reported	
	direct		inferred	assumed	reported	
	direct		inferred		reported	quotative
5 choices	visual	non-visual	inferred	assumed	reported	

(Aikhenvald 2004: 63) より

### 3. [-i] が示す evidentials

#### 3.1 言語主体のグラウンド化

形態素 [-i] の働きを見るためには、場面を備えて実際に運用されている [-i] の振る舞いを観察する必要がある。本稿では小説の文章における [-i] の振る舞いを観察し、[-i] が示す evidentials について考える。

小説を構成するスキーマを「語り」スキーマと呼ぶ。図1で示す。

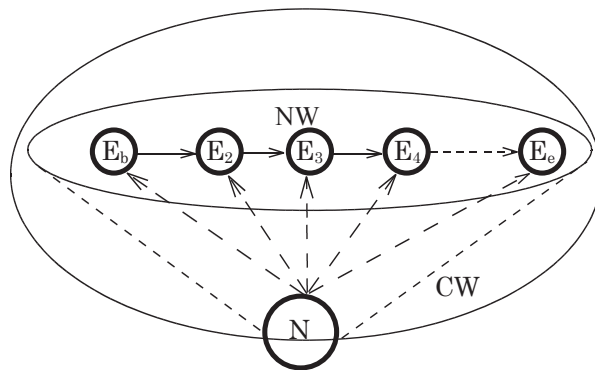
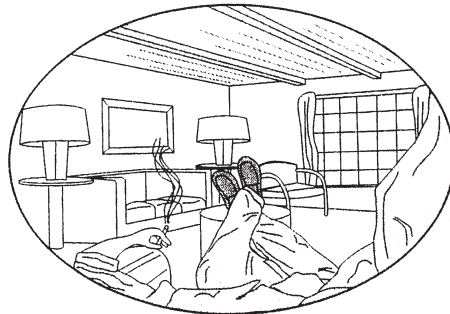


図1 「語り」スキーマ

図1では事態を解釈する概念主体の位置に語り手 (narrator (N)) が位置する。語り手の最大視野および認知の最大領域が語り手の見做し世界 (Conceived World (CW)) を意味する。われわれが事物を見る場合、ある対象を注視する背景に多くのことが見えているように、語り手がある事態を語る時、語り手の頭のなかには同時に多くの事態が思い浮かべられている。見做し世界はそれらすべての事態を包括する世界である。語り手は見なし世界のなかで思い浮かぶさまざまな事態のなかから語り世界 (Narrated World (NW)) に実在すると主観的に解釈する事態 (Event (E)) を一つ、また一つ、と選択して世界に据え置きながら、〈始め〉の事態 (Eb) から〈終わり〉の事態 (Ee) に向かって語り世界を構成していくのである。語り手から事態への破線は、その事態を意図的に選択し、〈実在〉を解釈する語り手のパースペクティブを反映する。

日本語の語りスキーマでは、小説を構成する一個一個の文の文末を表示する [-ta] と [-ru]<sup>(5)</sup> が語り手の二種類のパースペクティブを反映する。[-ta] は、まるで舞台を見る観客のように語り世界から距離を置き、世界の外側から世界を構成すべく事態を据え置く語

り手のパースペクティブを反映する。一方, [-ru] は語り世界の中に位置する作中人物<sup>(6)</sup>に移行させた語り手のパースペクティブを反映する。そして, 本稿で考察対象とする [-teiru] や形容詞, 助動詞の [-i] が反映するのはこの作中人物のパースペクティブである。言い換えれば, [-i] の表出には作中人物の存在が背景化されている, つまり, [-i] が表出される際には言語主体としての作中人物がグラウンド化されており, このグラウンド化された地点から作中人物は事態の実在を解釈しているのである。このようなグラウンド化された地点からの外部世界の対象の知覚は, 山梨 (2008) では「マッハの自画像」を用いて次のように説明されている。「このマッハの自画像の図では, 寝椅子に横たわる知覚主体は背景化され, 知覚主体の鼻の左側の視界に, 同, 肘, 足などが部分的に見えているだけである。言語主体として話者のグラウンド化は, この図からも明らかである。グラウンドの地点は, 外部世界の対象を知覚する際には背景化され, むしろ知覚対象の方が前景化される傾向がある。」(山梨 2008: 124)



マッハの自画像

山梨 (2008: 124)

図2 マッハの自画像

つまり, マッハの自画像にあるマッハよろしく [-i] で表される事態には必ずその事態にパースペクティブを投げかけるグラウンドとして機能する作中人物の存在があるのであり, その作中人物が事態の有り様を解釈しているその有り様が [-i] に反映されているのである。したがって, このことから, 一個の人間が事態の有り様を解釈する態度を反映する [-i] には, その解釈を誘発するなんらかの Evidentiality が表示されると推測するのは妥当だろう。次節からその Evidentiality の実際を見ていこう。

### 3.2 [-teiru] の [-i]

山本 (2010) では日本語動詞の時制形式の意味を事態解釈の観点から考察した。まとめたものが表2である。

表2 日本語動詞の時制形式の意味

要因・事態		形式		タ		ル	
		非プロセス	プロセス	タ	テイタ	ル	テイル
現実	非プロセス	見做し／非直接		見做し／直接			
	プロセス	見做し／非直接		非現実		見做し／直接	
実在	非プロセス	対象実在判断		対象実在判断			
	プロセス	事態実在解釈		事態非実在解釈		事態実在解釈	
グラウンディング	非プロセス	遠隔		同位置			
	プロセス	遠隔		乖離		同位置	
主客観性	非プロセス	主観		主観			
	プロセス	主観		客観		主観	
時制	非プロセス	過去		現在			
	プロセス	過去		未来		現在	

(山本 2010)

表2からは、従来「現在」を示すとされている [-teiru] 形式は、グラウンドとの関係から考えると、主体が対象とする事態を自己と同位置に実在すると主観的に解釈する態度を反映する形式であることが分かる。このことを語りの構成における Evidentiality の観点から考察してみると、現実世界においてわれわれが今・ココの事態を解釈するのに自己の知覚と想起が作用するように、作中人物が今ココに存在する事態を認識するには作中人物の知覚と想起が作用していることが明らかとなる。その実際を見てみよう。

#### ① 視る

【01】三人の客がはいってきた。ぼくは飯をくっていた。「失礼します」そのなかの一人がそう自分に会釈し、すぐ前の卓を囲んですわった。ぼくの位置からいえば、五尺も離れぬところに、左右向かい合って二人、一人はぼくの正面にこちらを向いてすわっ [-teiru]。女中が蒸しタオルを運んだ。三人がしゃべりながら顔を拭いた。 (「顔」: 90)

「はいってきた」「くっていた」「すわった」というタ形式で語り世界の事実<sup>(7)</sup>を連続して描出してきた語り手は、「ぼくの位置からいえば」を語り世界へのスペース導入マーカーにして、自己の視座を作中人物「ぼく」の視座へとシフトさせる。そして、シフトした「ぼ

く」と同位置にある事態として「五尺も離れぬところに、左右向かい合って二人、一人はぼくの正面にこちらを向いてすわる」事態の实在を視覚情報を evidential にして認識している。evidential として「ぼく」の視覚情報が作用していることが「こちらを向いて」で露わにされている。

② 聞く

【02】 刑事たちは、拳銃を取り出して、弾丸が装填されていることを確認した。その後で、「出発するぞ」と、西本はいった。五人の刑事が、旅館を出発して、月明かりの中を、問題の保養所に向かった。保養所は、ひっそりと静まり返っ[-teiru]。何の物音も、聞こえてこない。ただ、小さな明かりがついているだけだった。「静かだな」と、三田村刑事が、いった。  
(『告発』: 250)

「刑事」の行動を「確認した」とタ形で事実として描出した語り手は、表立っては書かれていないが、「保養所に向かった」行為の当然の帰結として誰もが想定する「保養所に着いた」事態をスペース導入マーカーにして「刑事」に視座をシフトさせる。シフトした視座から聞いた情報を evidential にしてその实在を解釈した事態が、「ひっそりと静まりかえっている」と [-teiru] で表現されている。

③ 触れる

【03】 しかし私はすぐに気を直して、倒れている子どもを抱き上げました。女の子でした。身体からいっさいの力が抜け、布人形のようにだらんとし[-tei (ru)]ます。  
(『海辺のカフカ・上』: 55)

語り手はまず、作中人物「私」の行動を「抱き上げました」というタ形で語り世界の事実を提供する。次いで、「私」に視座を移動させ、子どもを抱き上げたときの触覚システム的作用によって「私」が得た感触を、「身体からいっさいの力が抜け、布人形のようにだらんとしています。」と表現している。触れた時の情報が evidential となって事態の实在が解釈されていることが [-teiru] に反映されている。

④ 嗅ぐ

【04】 地方の公営の体育館ということで旧式のマシンを予想していたのだが、実際にはびっくりするくらいの新鋭機がそろっていた。新しいスチールの匂いがまだ空中に漂っ[-teiru]。  
(『海辺のカフカ・上』: 113)

「新鋭機がそろっていた」というタ形で「地方の公営の体育館」のなかの状況事態を事実として表した後、語り手は「体育館」のなかに位置する作中人物に視座を移動させ、作

中人物の嗅いだ情報を evidential にして「新しいスチールの匂いがまだ空中に漂う」事態の实在を認識している。

⑤ 味わう

【05】紅茶が運ばれてきた。熱いし、その甘味が禎子の舌にしみこんだ。寒々とした日本海の空気の塩辛さが、唇のどこかにまだ残っ[-teiru]。「あの、食事はまだじゃないですか？」本多が顔をあげて聞いた。  
(『ゼロの焦点』：127)

「禎子」の味覚での感触を、語り手はまず「舌にしみこんだ」とタ形で表現し、語られる世界の事実として提示する。次いで、語り手は視座を作中人物「禎子」に移動させ、「禎子」の視座から「塩辛さが、唇のどこかにまだ残る」という事態の实在を味覚情報を evidential にして解釈している。

⑥ 想起

【06】三原は双葉商会を出た。どういうふうに関西に礼をのべて立ち上がったかおぼえぬくらいであった。(略)一つの思考を追いながら、街を彷徨した。▼安田は嘘をつい[-teiru]。彼は、急行《まりも》で到着したかのようによそおい、その時刻にあわせて、電報で呼びつけた河西と札幌駅の待合室で会ったのだ。  
(『点と線』：164)

タ形式で「三原」の行動を語られる世界の事実として幾つか提示した後、語り手は「三原」に視座を移行させ、「安田が嘘をつく」という事態の实在を解釈している。文脈から、「三原」のこれまでの知覚経験に基づく知識を evidential にして「三原」の思考内容のなかで、「安田」が「嘘をつく」事態の实在を解釈していることが分かる。

以上①-⑤からは、[-teiru] が反映する事態を同位置に実在すると解釈する言語主体の態度には、知覚パラメータが作用していることがいえる。また、⑥の想起とは過去の知覚体験に基づく知識を根拠にして実在解釈することである。これらから、[-teiru] についての Semantic parameters in evidentiality systems は次のようにいえる。

- [-teiru] の Semantic parameters in evidentiality systems

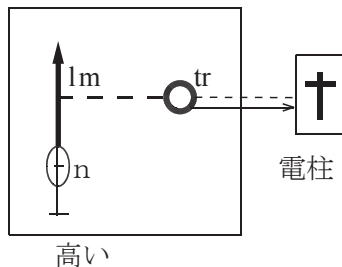
知覚	知覚経験に基づく知識
同位置実在解釈	

3.3 形容詞の [-i]

形容詞が反映する事態解釈の認知図式は図3で示される。認知言語学のアプローチでは、



どのような叙述も、基本的には認知主体の経験を反映するトラジェクター、ランドマーク<sup>(8)</sup>の関係から規定していくことが可能となる。形容詞や形容動詞の場合には、基本的に叙述の対象として主語にくる存在はトラジェクター、叙述にかかわる認知のドメインはランドマークとしての位置づけが与えられる。図3での太線の矢印は、高低のスケールに相当する。たて長のサークルで囲まれた -n は〈高い/低い〉の判断の基準点 (norm) を示している。この図では、トラジェクターとしての「電柱」が、主体が高いと判断する基準点より上に位置するランドマークの部分に位置づけられている。



(山梨 2000: 42)

図3 形容詞

つまり、形容詞によって表される事態は、グラウンド化された言語主体が基準点との差を主観的に判断するその態度が示されているのである。このような事態解釈の観点から次の例文に現れる [-i] のはたらきを考えてみよう。

【07】 駒子が帰ってから島村も村へ散歩に行ってみた。▼白壁の軒下で真新しい朱色のネルの山袴を履いて、女の子がゴム鞠を突いているのは、実に秋であった。▼大名が通った頃からであろうと思われる、古風な作りの家が多[-i]。庇が深[-i]。二階の窓障子は高さ一尺ぐらいしなくて長細[-i]。軒端に萱の簾を垂れている。▼土はの上に糸薄を植えた垣があった。(『雪国』: 89)

【07】 では「駒子」が視覚システムを媒介として「古風な作りの家」、「庇」、「窓障子」を見たことがevidentialとなり、彼女の主観的基準に基づく判断が、それぞれ、「多い」「深い」「細長い」といった [-i] で示されている。

【08】 縮みの産地はこの温泉場に近[-i]。山峡の少しずつひらけてゆく川下の野がそれで、島村の部屋からも見えていそうだった。(『雪国』: 129)

【08】で「縮みの産地」が「この温泉場に近い。」と判断しているのは「島村」である。「島村」は過去の知覚経験から「縮みの産地」の場所を認識しており、その過去の経験による知識を evidential にして、「縮みの産地」と「この温泉場」との位置関係を「近い」と主観的に判断している。

【09】三原は煙草を取り出して喫った。部屋には誰もいな[-i]。ぼんやり考えるには都合がよかった。 (『点と線』: 150)

【09】では「部屋」の中に居る「三原」は「部屋」を眺め、視覚情報を evidential にして「誰もいない」ことを判断している。

以上から、【07】【09】では知覚のうちの視覚がパラメータとなる Evidentiality が現れている。そして、形容詞 [-i] では、このような視覚のみならず、例えば、「痛い」では触覚をパラメータとし、「うまい」は味覚をパラメータとするというように、五感すべてをパラメータとする Evidentiality として現れることは例文を挙げるまでもないだろう。また、【08】では過去の経験から得た知識がパラメータとなっている。したがって、形容詞の [-i] についての Semantic parameters in evidentiality systems は次のようにいえる。

- 形容詞の [-i] の Semantic parameters in evidentiality systems

知覚	知覚経験に基づく知識
同位置判断	

### 3.4 助動詞の [-i]

[-i] 形式で終わる助動詞は多い。ここでは、その代表的なものとして「らしい」「かもしれない」を採り上げて考える。

#### (1) 「らしい」

【10】男が一人の女の手を引っぱっている。自動車の中に入れようとするらし[-i]。女は拒んでいる。他の女たちも、がやがやと騒ぎながら男をなだめていた。男は遂に諦めたらし[-i]。何か言って笑っている。 (『張り込み』: 327)

【10】の二つの「らしい」は同じはたらきをしている。まず、作中人物の視座から視覚情報を evidential にして解釈された事態実在が「ひっぱっている」と [-teiru] で表出される。そして、それに続いて、視覚で捉えたその情景を evidential にした作中人物の推論が「らしい」で描出されている。

## 日本語における Evidentiality

### (2) かもしれない

【11】禎子はおじぎをしたが、心はまださっきの姿に惹かれていた。義兄によく似ていたが、それは錯覚だったかもしれない[-i]。一瞬の目の迷いであろう。(『点と線』: 125)

【11】視覚情報として認識した「さっきの姿」を evidential にして、それを「義兄」であるとするのは「錯覚だった」可能性があるとして「禎子」は推論している。なお、[-i] で終わる助動詞では、その多くが「かもしれない」のように文末が「ない」で終わる助動詞が多いが、それらの振る舞いも「かもしれない」と同様である。

以上、【10】では目の前の状況からの視覚情報を evidential にして、【11】では過去の知覚経験に基づく知識を evidential にして、言語主体が推論する様相を文末辞 [-i] が反映している。これらから、助動詞の [-i] についての Semantic parameters in evidentiality systems は次のようにいえる。

- 助動詞 [-i] の Semantic parameters in evidentiality systems

知覚	知覚経験に基づく知識
同位置推論	

### 3.5 まとめ

動詞 [-teiru] の [-i]、形容詞末辞の [-i]、形容動詞末辞の [-i] に共通する形態素 [-i] の意味を求めて Evidentiality の観点から考察した。小説の文章を言語資料として考察した結果からは、次のことが判明した。三種類の品詞に共通する形態素 [-i] の Evidentiality は、まず、知覚もしくは知覚体験に基づく知識をパラメータとする、次いで、対象とする事態を同位置で解釈するという点で共通している。しかしながら、その解釈の仕方は三者三様に異なる。まず、動詞では同位置での解釈が事態の实在解釈であること、次いで、形容詞では同位置での解釈が判断であること、最後に、助動詞では同位置での解釈が推論であることという三様である。まとめると表3となる。

表3 [-i] の Semantic parameters in evidentiality systems

	知覚	知覚経験に基づく知識
動詞 [-teiru]	同位置	实在解釈
形容詞 [-i]	同位置	判断
助動詞 [-i]	同位置	推論

## 4. おわりに

Evidentiality の観点から時制形式とされる形式を構成する形態素のうちから、動詞、形容詞、助動詞に共通する形態素 [-i] の考察を試みた。本稿では三者の共通パラメータを抽出したが、時制形式の表す Evidentiality の全容を解明するためには、ここで検証したそれぞれの言語形式と対応する形式のパラメータを抽出し、それぞれを比較、検討する必要がある。具体的には、動詞 [-teiru] に対応する [-teita], 助動詞 [-i] に対応する [-da] の evidential パラメータについての考察である。これらが明らかになることによって、日本語時制形式の Evidentiality の全体像が見えてくるものと考えられる。今後の課題としたい。

### (注)

1. 細江 (1973) では英語の時制形式の真なる意味を時制とすることに全面的に問題を呈している。
2. Langacker (1991, 2008) では英語の時制形式の意味を事態解釈の観点から説明されている。
3. 10th Conference Tense, aspect, Modality and Evidentiality (at Birmingham, 18-20 April 2011) では、20以上の言語について80以上のEvidentialityに関する発表が行われた。
4. 本稿においては [-teita] については言及しない。
5. 本稿ではあらゆる品詞における、文末の [-ta] に対応する [-ta] 以外の形式を [-ru] と呼ぶ。
6. [-i] の表出には作中世界に移行した語り手の二種類のパースペクティブが反映される。作中人物に移行されたパースペクティブと、語り手がそのまま語り手として語り世界に据える自己のパースペクティブとである。両者は [-i] の振る舞いとしては同一であり、本稿では作中人物に移行されたパースペクティブのみを例文として掲げる。
7. 語り世界の内部から事態を描出する [-ru] に対し、[-ta] によって表出される事態は、語り手が語り世界を構成する事実として描出したものである。
8. トラジェクターとランドマークの関係については山梨 (2009) を参照。

### (例文出典)

- 川端康成『雪国』新潮社, 1947 (=改版1989)  
 西村京太郎『告発』角川文庫新潮社, 2008  
 松本清張「顔」『駅路』新潮社, 1965 (=改版2008)  
 ———『点と線』新潮社, 1965 (=改版2008)  
 ———『ゼロの焦点』新潮社, 1971 (=改版2008)  
 ———『張り込み』新潮社, 2009 (=改訂1965)  
 村上春樹『海辺のカフカ・上』新潮社, 2007

## 日本語における Evidentiality

### (参考文献)

- Aikhenvald, Alexandra Y. (ed.). 2003. *Studies in evidentiality*. Amsterdam: J. Benjamins Pub.
- \_\_\_\_\_. 2004. *Evidentiality*. New York: Oxford University Press
- Boas, F. 1938. 'Language', in E. Boas (ed.), *General Anthropology*. Boston, New York: D.C. Heath and Company
- Chafe, Wallace and Nichols, Johanna. (eds.). 1986. *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, N.J.: Ablex Pub. Corp.
- Cornillie, Bert. 2007. *Evidentiality and epistemic modality in Spanish (semi-)auxiliaries*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter
- 細江逸記. 1973. 『動詞時制の研究』篠崎書林
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会
- Johanson, Lars and Utas, Bo. (eds.). 2000. *Evidentials*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar II*. Stanford University Press
- \_\_\_\_\_. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter
- \_\_\_\_\_. 2008. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論』大修館書店
- 山本雅子. 2004. 「語りのパースペクティヴ」『言語と文化』第5号. 愛知大学語学教育研究室
- \_\_\_\_\_. 2008. 「テイルの意味」『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房
- \_\_\_\_\_. 2010. 「日本語時制形式の意味：事態解釈の観点から」『言語と文化』第23号. 愛知大学語学教育研究室